ホクロの治療についてのご説明

①

【ホクロの治療法】

ホクロは黒アザの一種で、黒アザと違って 5、6 歳頃に出来ます。色素細胞が皮膚の浅いところにだけあるものは、茶アザに近い色をしており、これには、Qスイッチ・ルビーレーザーが効きますが、数ヶ月おきに4～5回の治療が必要となります。一方、色素細胞が真皮の深いところにまであって、黒い色をしているものにはレーザーは効きません。

一般に、ホクロは30歳を過ぎるころから盛り上がって色も薄くなりますが、Qスイッチ・ルビーレーザーは効きませんので、電気メスを用いての切除か炭酸ガスレーザーでの焼灼治療を行います。普通の大きさですと、2～3週間で傷はふさがり、傷の赤味も約半年で周りの皮膚の色と同じになります。その時くぼんだりケロイド状に盛り上がった傷あとは目立ちます。傷あとが最もきれいになるのは、周りの皮膚と同じ高さになることです。そのためにはできるだけ浅く切り取らねばなりません。色素細胞は真皮深層の毛根に潜り込んでいるのでこれを殺さねばなりませんが、炭酸ガスレーザーのようにその深さまで焼き取ると深くなりすぎます。電気メスの場合は針で毛根を焼き、本体だけ浅く切除が出来ますので周りの皮膚と同じ高さになりやすく、傷あとは殆んど判らないくらいに綺麗に治ります。したがって、当院ではきれいに治る電気メスを用いての切除を行っております。

【ホクロ治療後の処置】

ホクロの治療後には、傷がふさがるまでの間、抗生物質含有軟膏をぬります。軟膏を塗る目的は以下の二つです。

1）傷を保護して感染を防ぐため

2）カサブタにならないようにするため

1）の説明は特には必要ありませんが、2）については少し説明が要ります。カサブタにすると傷の治りが遅れるからです。カサブタはカチカチ・カラカラです。カチカチと言うことは硬いことです。障害物となって、周りから表皮が伸びてきて傷をふさぐのを妨げます。また、カラカラと言うことは湿り気がないことです。表皮が張るための大事な条件は水分が充分あることです。カサブタにすると傷の治りが遅れます。「傷は乾かす方がよい」というのは抗生物質のなかった時代の迷信です。

カサブタにすると傷の治りが遅れるもう一つの大きな原因は、引っ掻いた時にカサブタが剥がれるためです。その時にせっかく出来かけた表皮が引っぺがされ、また一から出直しになるからです。よくお母さんから「カサブタを取ってはいけませんよ」と言われたのはそのことです。

【軟膏の塗り方】

顔の場合は塗るだけでよく、昼間は約2時間置きに塗ります。こすれやすい手足や体の場合は、塗った上から絆創膏で保護します。

一般に治療後1週間もすると傷は痒くなってきます。傷が治り始めると痒くなるのです。つい無意識に引っ掻いてしまいます。カサブタにならないよう軟膏を塗っておきましょう。ただ、夜中には自制がききませんので引っ掻いてしまいます。顔の場合も絆創膏を貼っておきましょう。その場合、軟膏は多めに付けてガーゼに吸い取られないようにしましょう。軟膏が少なくなると“汁”がガーゼに吸い取られて固まり、ガーゼが傷に引っ付いて、毎朝“カサブタ剥がし”になるからです。

【軟膏を塗る期間】

軟膏は傷がふさがるまで塗り続けます。顔では2～3週間、手足や体の場合は3～4週間かかります。傷がふさがれば中止しますが、その前に傷がふさがったかどうかを確認せねばなりません。その確認の仕方は簡単です。

1） まず、軟膏をティッシュペーパーでしっかり吸い取ります。

2） 次いで1～2時間放置します。乾かすのです。

3） その結果、カサブタになるかならないかを見ます。カサブタになるときはまだ傷がふさがっていないということです。

一方、カサブタにならなければOK！ 傷がふさがったということです。

理由はこうです。傷がふさがっていないと“汁”が出ます。汁が固まったのがカサブタです。傷がふさがっていない証拠です。一方、表皮が張って傷がふさがれば汁がでません。したがってカサブタは出来ません。傷がふさがったということです。軟膏塗りは中止です。化粧をしてください。

ここで、1）の軟膏をティッシュペーパーでしっかり吸い取る理由ですが、軟膏が残っていると汁が固まりにくいためにカサブタが出来ません。その結果、傷がふさがっていなくとも傷がふさがったと誤解するからです。

【治療後の観察】

感染の恐れがないか、または軟膏の塗り方が正しいかどうかを確認するために、まず、1週間後に見せてもらいます。次いで治療後4週間目と8週間目に見せてもらいます。それは出来るだけ傷あとが平らになるよう浅く削っているために、底の方や毛根部に細胞が残っていることがあります。それを見るためです。その細胞は4週間目から8週間目頃に黒い色を出します。残して悪性の変化をさせてはいけないので、細胞を殺さねばなりません。その場合は電気メスの針を刺して電気凝固します。

また、眼瞼や口唇にあるホクロは、底が深いほどケロイド状に盛り上がりますので、その場合は6ヶ月以内に平らにしなければいけません。6ヶ月を過ぎると平らになりにくくなります。ケロイド状に盛り上がった場合は、副腎皮質ホルモンを含ませたテープを貼って平らにします。約2、3ヶ月で平らになります。

【治療後の結果】

顔では6ヶ月、四肢・躯幹では9ヶ月で周りの色とほぼ同じ色になります。

医療法人　優心会　　心石形成外科（レーザークリニック）

シミの治療についてのご説明

②

［シミの種類］

いわゆる“シミ”には**4つの種類**があります。その一つは、30歳代の後半になると顔や手足に出来る茶色の斑点で、老人性色素斑（しきそはん）といいます。表皮には毎日メラニン（茶色の色素）が出来ていますが、一方では捨てられているのです。このメラニンを捨てる能力が低下したために、表皮にメラニンが溜まったものがこのシミなのです。そして2～3年たつとシミの表面が盛り上がって来ることがあります。これが老人性疣贅（ゆうぜい＝いぼ）というもので、二番目のシミです。

三番目のシミは、肝斑（かんぱん）といって、両方の頬に蝶の羽根を拡げたような形で、薄茶色の色素斑がベター面に出来るものです。同じものが、ひたいや上口唇、あるいはあごや首などにも出来ます。これは女性ホルモンの分泌と関係が深く、妊娠した時や更年期の前後、あるいは子宮内膜症などの病気で出来ます。しかし、時がたつと自然に消える傾向があります。

さらにもう一つの四番目のシミは、遅発性太田母斑様色素沈着症といって、30歳代後半から、こめかみや頬にやや青みがかったどす黒い茶色の斑点が出来てきます。一般には遅発性太田母斑といいます。

このように、“シミ”と一口にいってもおおよそ4つの種類があるのです。そしてこれらは入り混じって出来やすいのです。

［シミ治療の原理］

表皮は最深部の**表皮基底膜**で細胞がつくられ常に修復されていますが、この大事な**表皮基底膜**が永年の**紫外線による障害で劣化（老化）します。**老化の結果メラニン排泄能力の落ちた表皮は決して元の若い状態には戻りません。若返りは不可能です。**そこで表皮基底膜ごと完全に捨てて、新しい表皮に生まれ変わらせる必要があります。表皮と毛と爪は人間の体の表面で唯一再生可能な組織です。不可能な若返り治療はあきらめ、レーザーで古いパーツを捨てて新品のパーツに交換するわけです。**

レーザーのエネルギーがメラニンに吸収されて高熱を出すので、メラニンを多く含む表皮（シミ）は焼け死にます。その後に再生する若い表皮は、メラニン排泄能力が正常な働きをするため、メラニンが溜まらずシミにはならないのです。

これに対してビタミンCや美白剤などは、メラニンが出来るのを阻害する働きがあるので、シミは一応薄くなりますが、表皮を若返えらせる働きはありません。**表皮の老化はそのまま残ります。**紫外線に当たるとたちまち**元のシミに戻ります。**

それでは個々の治療についてご説明いたしましょう。

1）老人性色素斑：Qスイッチ・ルビーレーザーを用います

薄いシミは1回の治療で確実に治ります。レーザーを当てると、その部分の表皮が焼かれて紫褐色になります。**約7日間で新しい表皮が再生します。**死んだ古い表皮を剥がすと再生した表皮が現れます。再生したばかりの表皮はメラニンがまだ出来てないので透明で、その下の真皮が透けて見えます。真皮にメラニンがないと美しいピンク色に見えます。しかし、再生した表皮のメラノサイト（メラニンを作る細胞）は非常に元気なので、少しでも紫外線に当たると**過剰にメラニンを作るため、遮光が必要です。**それらの注意は、治療後にお渡しする［レーザー治療後の処置］に書いてあります。

老人性色素斑の濃いものは、表皮に溜まりきれなくなったメラニンが真皮に落ち込んでたくさん溜まって濃く見えるのです。この場合は下に書いてある老人性疣贅の治療と同じく、2種類のレーザーを使う当院独自の治療法で確実に1回で治します。

2）老人性疣贅：表皮が盛り上がって分厚くなっている程度のものは、ノーマル・ルビーレーザーで強く焼いて表皮をはがします。その後、表皮から落ち込んで真皮にたくさん溜まっているメラニンを真皮深く入るQスイッチ・ルビーレーザーで焼きます。したがって、やけどもやや強くなるので、**表皮が再生するまでに約10日程度かかります。**その時、**真皮にメラニンが一部残っていることがありますが、その場合には、再度そこを焼くことがあります。**

それ以上にイボ状に高く盛り上がっているものや、首にたくさん出来る、蛸（たこ）の頭の形をしたイボ状のものにはレーザーは効きにくいので、電気メスでそぎ取ります。

3）肝斑：肝斑にレーザー治療やケミカルピーリングなどの治療をすると、治療前よりもいっそう黒くなり、2、3年間消えません。これを無理に取ると、まわりが自然に治った時に、その部分が脱色されたままになることがあります。したがって、肝斑の場合には**無理な治療はおこなわずに自然治癒を待ち、もっぱら遮光を心掛けることです。**　ただし、「トランサミン」の内服は効果があります。肝斑はホルモン失調により生じた真皮上層の炎症による刺激で表皮メラノサイトが活動し、表皮のメラニンが増えて起こるとされています。トランサミンは炎症を抑える作用があり、真皮上層の炎症を抑えるからです。

4）遅発性太田母斑様色素沈着症：いわゆる遅発性太田母斑は、メラニンを作るメラノサイト（色素細胞）**が真皮の中にあるので、**これを殺さねばなりません。治療では、老人性疣贅の治療と同様、ノーマル・ルビーレーザーでまず表皮を剥離して真皮を露出し、次いで真皮の深いところにまで届くQスイッチ・ルビーレーザーを使います。メラニンが溜まっただけの他のシミと違って、真皮のメラノサイトを殺さねばならないので、**治療は1回では済まず、約2回必要となります。**

治療の間隔は太田母斑の治療と同様、2～3ヶ月後となります。最初の治療後、表皮に一度必ず強い色素沈着が起こりますが、2回目の治療後には色素沈着は起こりません。

当院では、Qスイッチ（ルビー、ヤグ）レーザー、ノーマル・ルビー、ダイ（色素）、炭酸ガス、脱毛、しわ取りレーザーなど、アザとシミ・しわ、いれずみの治療に有効な全ての機器（7種類）を揃えて治療を行っています。

なお、治療後の処置については、もう一枚の説明書［レーザー治療後の処置］をお読み下さい。これは、実際に治療をするときにお渡しします。

医療法人　優心会　　心石形成外科（レーザークリニック）

レーザー治療後の処置

【シミ治療後の処置】

1）引っ掻かないこと：レーザー治療後はやけど治療の軟膏をつけますが、2、3日して表皮が再生する時にかゆくなります。そこで引っ掻くと、せっかく出来た表皮を引き剥がすことになります。これをたびたび繰り返すと“きずあと”になったり、下記(※)のように濃い着色を残します。これを防ぐために治療直後に**被覆材を貼ります。そうすると顔の場合は約５日、手足や身体の場合は約10日で表皮が再生しますが、顔の場合は７日間、手足や身体の場合は14日間被覆材を貼っておきます**（出来たばかりの表皮は弱く、こすれて剥げるおそれが強いからです）。

できるだけ貼りっぱなしにしておくべきですが、もしその前に被覆材が剥げたときには、再生しつつある表皮を引き剥がさないように注意して被覆材を貼り直して下さい（あるいは重ね貼りして補強して下さい）。

ただし、トビヒや水疱瘡、ヘルペスに感染した場合は、被覆材を貼ったままだと感染がひどくなるおそれがありますので、直ちにご連絡の上、お越しください。

2）日光をさえぎること：顔の場合は７日後、手足や身体の場合は14日後に当院で被覆材を剥がします。そしてその後に行う遮光の方法をご指導します。再生した表皮はまだメラニンを作っておりませんので無色透明で、ピンク色の真皮が透けて見えますが、**生まれ変わったばかりのメラノサイトは非常に元気がよいので、少しでも日光に当たると大量にメラニンを作ります。元気な期間は約３ヶ月で、特に最初の１ヶ月で元よりも濃くなることがあります。**

（※）顔に７日間も被覆材を貼っておくのは大変見苦しく精神的に苦痛ですが、被覆材を貼らずにいると、夜中に引っ掻いて出来かけの表皮を引き剥がすことになります。そうすると表皮が張り終わるのに２～４週間かかります。表皮の剥げたところからは“汁”が出ますので遮光の化粧はのりません。その一方、表皮の生えたところはもろに紫外線をかぶりますので、極めて濃く着色します。７日間、我慢して被覆材を張っておきましょう。

遮光には次の３つの化粧品を用います。

① メラニン生成阻害剤（ハイドロキノン）含有クリーム
② 遮光クリーム（日焼け止めクリーム）
③ 遮光性ファンデーション（ただし、男性で化粧が出来ない場合は①、②のみを用います）。

これら３つの化粧品でしっかりと遮光をします。遮光の期間は３ヶ月間です。

ここで最も大切なことは、起床したら直ちに洗顔して治療部の遮光をすることです。朝、周りが明るいことは室内でも紫外線が一杯あるということです。だから直ちに遮光を行う必要があるのです。朝食が済んでからではいけません。

普段と同じように紫外線を浴びても、周りの皮膚は全く日焼けしませんが、生まれ変わったばかりの表皮のメラノサイトは元気がよいので、**ごく短時間でも、あるいは窓からの反射光や曇り日の少量の紫外線でも、大量のメラニンを作ります（曇天の紫外線量――晴天の81～95%；雨天の紫外線量――晴天の21～54%）。家の中に居るから、あるいは今日は曇っているからと化粧を怠ってはいけません。**

また、時々鏡で化粧の乗り具合をチェックして下さい。化粧が薄くなってピンク色の地肌が透けて見えることがあります。人は気になる部分に触る癖があります。それによって化粧が薄くなるのです。無意識に触っているので、化粧が薄くなっていることには気が付きません。長時間紫外線にさらされることになります。直ちに化粧を塗り足して下さい。

一度濃くなっても、生まれ変わって新品になった表皮は余分なメラニンを新陳代謝で排泄するので必ず消えますが、消えるのに６ヶ月以上かります。一方、被覆材を貼らないでいて濃くなったもの(※)は１年以上かかります。

また、**遮光クリームは有効時間、使用方法に気をつけて下さい。**

【扁平母斑（茶アザ）治療後の処置】シミ治療と同様の処置となります。

【太田母斑（青アザ）治療後の処置】シミ治療と同様の処置となります。

【血管腫（赤アザ）治療後の処置】　シミに比べて真皮深くの血管まで焼けるので、表皮が再生するのに時間がかかります。**治療後、約２週間は被覆材を貼っておきます。**その後の遮光はシミの場合と同様です。（ただし、2003 年 9 月からは、心石の考案した圧迫冷却装置を用いて治療を行っているので、痛みも少なく、表皮の剥離も起こりません。したがって、顔の場合は、治療後すぐに化粧が出来ます。また、再生した表皮ではないので、その後の遮光の必要もありません。手足や身体の場合には、念のため１週間だけ被覆材を貼っておきます。遮光の必要はありません。）

シミの治療、アザの治療とも、別にお渡しする『シミの治療についてのご説明』、『アザの治療についてのご説明』を参考にして下さい。

医療法人　優心会　　心石形成外科（レーザークリニック）